

多文化ソーシャルワークの視点から 異文化「終活」を考える（その2）

2021年8月28日（土）に、愛知県立大学生涯発達研究所は、あいち多文化ソーシャルワーカーの会、外国人高齢者と介護の橋渡しプロジェクト、多文化ソーシャル・ムーブメント（TSM）と愛知県立大学地域連携センターとの共催で、「多文化ソーシャルワークの視点から異文化「終活」を考えるセミナー（その2）」を、Zoom ミーティングを利用したオンライン開催で実施した。その内容を以下に掲載する。

コーディネーター：木下貴雄（王榮）（あいち多文化ソーシャルワーカーの会）

報告：

フィリピンの終活事情	ネストール・プノ
ベトナムの終活事情	原田美河
在日コリアンの終活事情	金順愛（キム スネ）
ネパール人の終活事情	シバラム カドカ

まとめ：山本理絵（愛知県立大学教育福祉学部教授）

司会：神田すみれ（愛知県立大学客員共同研究員）

報告者プロフィール

○金順愛 (キム スネ)

社会福祉士・介護福祉士・介護支援専門員、一般社団法人 Moment 代表理事

朝鮮大学校政治経済学部卒業。1987年卒業後に朝鮮新報社の記者として朝鮮人強制連行真相調査団の活動を担当する。1992年7月より、朝鮮総聯愛知県本部社会部（後に同胞生活部、権利福祉部に名称が変わる）に所属し、在日コリアン同胞の権利問題、福祉問題を担当する。

2003年2月22日、NPO法人コリアンネットあいち設立に事務局長として携わる。

2013年11月、レシピ本「ハンメの食卓ー日本で作るコリアン家庭料理」出版を企画・監修する。

○ネストール・プノ

フィリピン・マニラ出身。1998年来日、1999年より日本聖会中部教区宣教師、名古屋学生青年センター管理者、国際子ども学校主任教師。

フィリピン人移住者センター (FMC) 副代表、在日フィリピン人の会 (PSJ-Nagoya) 代表、サギップ・ジャパン (SAGIP Japan) 代表を務めている。

○原田美河 (旧姓：マ・カム・ロン・ハー)

ベトナムホーチミン市出身、日本福祉大学大学院国際社会開発研究科修士課程を修了。

介護福祉士、NPO法人アジア高齢者・障害者介護福祉協力会理事、一般社団法人愛知県介護福祉士会理事。

1991年、ホーチミン市師範大学卒業。1992年から、ホーチミン市大学歴史学科教員、旅行会社日本語ガイド、ベトナム日系企業での勤務を経て、1998年、国際結婚のため来日、安城市在住。来日後、デイサービス、有料老人ホーム、協同組合での勤務を経て、現在、総合福祉施設グレイシャスビラ安城で主任として勤務。

○シバラム カドカ

ネパール出身、株式会社 PANACEA JAPAN 代表取締役。

2006年来日、愛知大学を経て、名古屋大学大学院博士後期課程に在籍し、国際開発、経済開発の研究に携わる一方、NCN (ネパール・コミュニティ・ナゴヤ) の代表、名古屋国際センター地球市民教室講師を務めるなど、ネパールの被災地支援活動や在住外国人の防災啓発、国際交流、多文化共生など、多岐にわたる社会活動を行っている。

趣旨説明

木下貴雄（王榮）

今回のセミナーの趣旨、目的について、華僑と華人の老後事情を踏まえ、少し説明します。私は、中国帰国者の二世で、日本に来て 40 年近くになります。最近、介護の活動を行っています。その中で、弔いについての問題が出てきたため、昨年、愛知県立大学の地域連携センターの講座の一環として関わりを持ちました。

先ほど、山本先生からも、異文化「終活」とは何かという説明がありましたが、異文化「終活」についてはまだ適切な定義がなく語られてきた部分もあったため、よく分からないという声も時折、聞いています。ここで、異文化「終活」とは何かという定義について、おさらいしておきたいと思います。

広い意味で、日本も「終活」がブームです。日本の「終活」はどちらかというと、死に対する準備というイメージが強いですが、ここでいう異文化「終活」には二つの意味があります。広くいうと、外国人高齢者が、これからの日本での老後生活を、どのように過ごすのかというライフプランです。これからの自分の人生を、どのように送っていくのかということです。幅広く、医療、介護、年金、住まい、生きがい、病気、終末期ケア看取り、葬儀、墓、相続といったことを、今後の生活においてどのようにしていくのかを考えることが、広い意味での異文化「終活」です。

狭い意味では終末期ケアや看取り、あるいは葬儀や墓などについて、自分の人生の最期をどのように迎えるのかということです。自分らしい最期を迎える、その締めくくり方です。このような定義の下で、異文化「終活」について、今後も皆さんとともに検討し、議論していきたいと思います。

ここからは、なぜ異文化「終活」が必要なのかについてです。華僑華人のオールドカマーの老華僑たちの老後事情を紹介しながら、考えていき

たいと思います。その前に、在日中国人とひとくくりにされることが、一般的に多いと思いますが、実は、在日中国人の中では、華僑と華人の二つの定義があります。これは、あまり知られていません。そもそも、華僑という言葉は 1870 年代から 1880 年代前後に、外国に住んで商売をしている中国人たちのことを“僑居華民”といい、それを逆から読んで“華僑”といったことが始まりといわれています。

華僑という言葉を使う前には、唐人といいました。長崎にも唐人館があります。華というのは中華の華です。僑は一時の滞在、仮の住まいということ。つまり、本拠地ではありません。臨時にそこで暮らしているのが華僑です。華僑たちは、さまざまな国で暮らしています。中国政府が、現地での市民権を取得するように呼び掛け、そこから華僑が普及しました。

華僑と華人の違いは大事です。中国人に華僑か華人かと尋ねると、華僑ではないという人もいます。国籍により、華僑と華人の意味が大きく変わります。中国国籍のまま、海外で生活している中国人は華僑です。現地の国籍を取得した中国人は華人です。ここに大きな違いがあります。国籍により、華僑なのか、華人なのかが変わります。ここを意識してほしいと思います。

日本でも、横浜や長崎などに、多くの華僑華人のオールドカマーが暮らしています。華僑華人の特徴として、三縁、三宝、三把刀とよくいわれます。三縁は三つの縁です。血縁、地縁、業縁で、同族、同業、同胞のことです。看板、地盤、かばんだったと思います。日本の選挙にも似たようなフレーズがあります。特にオールドカマーは、縁を非常に大事にします。地域や場合によっては縁が増えていきます。四縁で、同じ学業や信奉などです。三つの宝は、コミュニティと学校、新聞です。もう一つ宝が増えると、華僑同士の婚姻ということもいわれています。

新聞の写真を紹介します。こちらは、1995 年から 2007 年までに名古屋で発行された日中 2ヶ国語エスニックメディア月刊紙『東海国際新聞』で

す。私も編集に関わっていました。この新聞のタイトルの色を見ると、どこかの新聞社のタイトルに非常に似ていることに、気が付いている人もいられるかもしれません。地元の新聞社の支援の下で、十数年間にわたりこの新聞を発行することができました。コミュニティにおいて、この新聞情報は非常に大事です。

三つの刀である三把刀は、老華僑の職業を表しています。包丁と、今はバリカンですが昔の理容店で使うかみそりと、仕立屋のはさみです。これが職業の三つの刀物です。そこに、職業の関係でもう一つ医療分野のメスが増えました。ある意味で、時代の職業を象徴するものでもあります。オールドカマーである老華僑の特徴としては、皆さんが生計を求めて中国から海外へ出てくるのでとても低学歴です。そして貧困世代です。貧しさゆえに、海外に夢を求めているのが一つの特徴です。

次はニューカマーについてです。新華僑華人です。これは主に、日中国交回復以降、特に1980年代以降に来日した人です。留学や研修、ビジネス、就労などで来日した人が、新来中国人ともいわれるニューカマーです。中国帰国者もここに属しています。ニューカマーの特徴としては、中国も随分と豊かになってきており高学歴が多いです。そして多様化、重層化しています。留学、研修、ビジネス、就労などの多様な人たちが来て重層的になっています。もう一つの特徴として、定住化の傾向が強いです。1950年代から1960年代に生まれた人が多いので、今の中国は豊かになってきているけれども、80年代はまだそれほどではない時代です。言わば、半貧困世代の人たちです。

三つ目は、新生華僑華人です。私が付けた名前です。1980年代、1990年代に生まれた人たちです。バーリンハウ、ジョーリンハウといわれた若者です。留学で来た人、もしくは技能実習生として来た人が非常に多く、年代はおよそ30歳代前後です。この人たちは高学歴で、半多様化、半重層化です。昔ほど幅は広くありません。留学か技能実習の形です。定住するのかといえば、必ずしも日本に定住を求めています。浮動化です。この人

たちは一人っ子が多く、裕福世代といわれているのが、今の留学生や技能実習生の人たちです。以上は、今まで日本に在住している中国人の背景であり特徴です。

本日の本題に移ります。日本には華僑華人の共同墓地は数多くあります。オールドカマーの歴史を見ると、日本の港の開港とともに横浜や長崎などに移住してきています。定住に伴い、暮らす間に病気などで亡くなる人もいるため、自然に墓地ができました。代表的なものを北から見ると、函館に中華山荘、札幌に華僑公墓、神戸、横浜に中華義荘、京都に華僑霊園。長崎は昔から唐人墓地があり、歴史的にも長いです。沖縄には台湾出身者の台湾同郷之公墓と大陸出身者の唐人墓があります。また、北は東北から南は九州あたりまで、全国に17カ所の中国帰国者のための公墓、もしくは墓地が作られています。約15年前、名古屋市八事霊園に中国帰国者のために建てた公墓もあります。

オールドカマーである華僑華人たちが、なぜ、日本に移住した後に共同墓地を建てたのかといいますと、それは一世たちがたどってきた歴史や思いが生んだものであり、そんな一世たちのアイデンティティーの表れでもあるといえると思います。中国語で「落葉帰根」(ロウイェグエイガン)という熟語があります。葉が落ちたら根元に帰るという意味です。この言葉は、特に海外に暮らす中国人にとって、非常にアイデンティティーを表現しています。つまり、死んだら故郷に帰るという意味を持っています。異国にいる者の望郷の思いが、この言葉に強く表れています。

異国で生き、死ねば故郷に帰ることに、華僑華人の墓の視点があります。日本で亡くなったから日本に埋めるのではなく、亡くなっても遺体は必ず故郷に帰り、故郷の地になるということで、仮の埋葬場所として共同墓地が作られました。中華義荘といいます。当時は、定期的に遺体を運ぶ船がありました。船が来るまでの間に仮埋葬し、船が来れば遺体を乗せて母国に帰りました。船には“帰還船”や“太平船”という名前が付いていま

した。

華僑華人の永住に伴い、あるいは中国生まれの一世と、日本生まれの二世、三世の価値観の違いがあります。特に二世、三世は徐々に中国語も話せなくなってきました。母国語による意思疎通は、親との間でできなくなっています。故郷に対する思いは、一世たちとの違いが出てきます。そのようなさまざまな事情により、仮埋葬の場所が最終的な終のすみかとなりました。今は、ほとんど国に遺体を帰すことがなくなり、墓地として使われている状況です。

老華僑たちは学歴が非常に低かったので、家族を養うために懸命に働いてきましたが、日本語の壁を乗り越えることもできず、日常生活において中国人的な要素を多く残している人も少なくありません。先ほどの話にも出たように、日本生まれの子や孫との間での価値観の違いにより、また、言葉の問題もあり、距離感を意識するようになります。家族内の共通の言葉が日本語になり、コミュニケーションが取れないといった中で、孤独を感じるようになっていきます。子どもたちの感情が離れていくことも見受けられます。

二世、三世の世代からすれば、その親やおじいさん、おばあさんの故郷に対する思いや感情について、もはや理解できなくなっています。逆に、親世代からすれば、それに非常にさみしさや絶望感を感じてしまいます。人というものは、年をとっていくと、どうしても孤独になることがあります。ある意味で、異国に生きる華僑華人に限らず、異文化の背景を持つ皆さんは、普通の日本人以上に孤独感を感じやすくなっていると思います。

介護問題については、実は、老華僑、老華人は、言葉や習慣の問題で、普通の老人ホームになじめないという問題も発生しています。今のところ、老華僑、老華人専用の老人ホームは存在していません。子どもたちで面倒を見たり、一人暮らしをしたりするケースが多いです。横浜でのある調査では、年を取った華僑たちの中には、在日コリアンのように自分たちの施設を考えなければならぬと考える人もいます。少なくとも、自分たちが

これから日本で暮らしていく中で、どのようにすれば自分たちにとって良い環境がつけられるのかということ、考える必要があると語る人も、数は少ないですがいました。

私が最も印象に残ったのは、若いうちに老後のことを考えなければならぬと言った人がいたことです。年を取ってからでは、老後のことを考えられなくなってきました。気力も行動力もなくなり、これからなんとかしようと思ってもできなくなります。自分の老後をどのようにしたらいいのか、若いうちに考えたほうが良いと言っていました。気力と体力があるうちに、老後の生活をどのようにしたらいいのかという、ライフプランをしっかり立てていかないと、何とかなると思っているにもかかわらず、実際はなんともなりません。そのようなことも出てくるので、異文化終活の一環としてライフプランを考えていく必要がありますし、自分の人生の最期をどのように締めくくっていくのかということも大事だと思います。

一方で、ニューカマーたちはどうかといいますと、彼らも日本で定年を迎えようとしています。数としても、かなりの人数が存在しています。この人たちが、これからどのように老後を送るのかということ、日本で生きていくのか、あるいは中国に帰るのかという選択に直面しています。迷っている人も多いです。

この世代は、およそ60歳前後の人が多いです。ある意味で複雑な事情を抱えている世代でもあります。自分の老後と親の老後、あるいは親の死という二つのことについて考えなければなりません。この世代にとって、この二つを考えていくことは、非常に大変なことだと思います。また、老華僑のような横のつながりは、とても薄いのです。個人主義が割合に多いです。組織に加入していない人が多く、コミュニティがあるように見えますが、そのネットワークが将来的にどこまで役割を果たせるのかは疑問に思う部分もあります。このニューカマーたちが日本で老後を迎えたとき、もしかすると、オールドカマーよりもつながりという意味では、より孤独に陥りやすい側面を持っている

のではないかと感じています。

オールドカマーの華僑華人の老後事情から見ると、これからさまざまな背景を持つ人々が日本で生きていく中で、医療看護や介護において、終末期ケア、看取り、弔いは、言葉もそうですが、文化と習慣、特に宗教が異なるため、本人あるいは家族が納得できる最期を日本で迎えられるかどうかの問題です。日本で生きてよかったと思えるかどうかが大事であり、特にこれからは、それを支えていくことが必要になってきます。私が、父親の最期や帰国者で亡くなった人を見てみると、母国語による、このあたりのケアが非常に大事だと感じています。

これから、外国人高齢者が増えていく中で、日本で最後を迎える人が、当然、増えていきます。本人たちにとって、自分の人生をどのように設計していくのが大事ですし、それを支えていくサポート体制も大事です。ただ、残念ながらその体制がまだできていません。これから構築していく必要があります。やっと、ここ数年あたりで、外国人高齢者問題が意識されるようになってきましたが、まだ不十分であり、異文化終活という部分では皆さんが意識されていません。このセミナーを通して、外国人高齢者の介護の先にあるものは弔いだということ或少しでも意識してもらい、共に考えていただけたらと思います。考えるだけではなく、考えて行動を起こし、それを社会全体で支えていけるように、していかなければならないと思います。

この春、外国人による外国人のための葬儀支援が、石川県加賀市からスタートしました。インド出身のラビンダーさんが代表を務め、加賀市で、日本で亡くなられた外国人の葬儀を無償で支援しています。さまざまな煩雑な手続きを代行し、支えていくという活動をスタートしたばかりです。これから必要不可欠な活動です。ホームページやTwitter 等もありますので、ぜひ、皆さんも関心を寄せて、応援をしていただけたらと思います。本日は、ラビンダーさんもこのセミナーに参加されていると聞いています。後ほど、ディスカッション

のときに時間があれば、いろいろと発言してもらえればと思います。今回は2回目のセミナーではありますが、できれば次は個人レベルではなく、寺や教会、モスクや葬儀会館などのかたがたの観点から、異文化の弔いについて考えることができると考えています。私の話は以上です。

ここからは、四つのコミュニティから、在日コリアンの金さん、フィリピン出身のネストールさん、ベトナム出身の原田さん、ネパール出身のシバラムさんの4人に、個々のコミュニティでの弔いについて話していただきます。

報告

フィリピンの終活事情

ネストール・プノ

フィリピン出身で名古屋に住んでいるネストールです。今回は、「終活」ということで話をしますが、私は「終活」というものがよく分かりません。フィリピンでは、80パーセントのフィリピン人がカトリックです。ですから、生きている間のメインとなるのはLife After Deathで、特に宗教的に活動している人の考え方にはそのようなことがあります。その辺りを、フィリピン人はあまり考えていない人も多いです。

80パーセントはカトリックなので、カトリックのスタイルで葬儀をします。フィリピンでは3日から1週間ほど、皆さんが24時間、ひつぎを見られるようにそのまま置いています。一般的には、自分の家で葬儀をしますが、そうではなく葬儀場でも行います。貧しくて葬儀場の費用が払えない人は、家の道路上でも行います。その周りは1週間ほどにぎやかです。日本では考えられませんが、人にすごく迷惑をかけているといいますが、1週

間 24 時間は誰かが必ずいなければならない、歌ったり、話をしたり、ギターを弾いたりします。

なぜ1週間かという、特に宗教的なことではなく、遠くにいる家族もあいさつができるようにということが目的です。海外など遠い所からでも皆が来られるように、1週間ということです。写真を見る限りでは路上の真ん中です。この状態では、人は通れますが車は通れません。埋葬の日は、一日中、忙しいです。フィリピン人の家族にとっては、亡くなったことはとても重要です。

都会と田舎には、このような形で教会に入る前に長いプロセッションのようなものがあり、皆がひつぎの後を歩いて教会まで行きます。教会では、神父に祈ってもらい、そこから葬儀場へ行きます。フィリピンでの埋葬は、地上か地下に埋める形です。

フィリピンでは、亡くなったときのステータスのギャップが見られます。貧しい人々の墓は、ひつぎを入れる棚のようなものが5段に積み上げられて、次々と並んでいるものもあります。一般的な墓は地上に並べられています。お金のある人の墓は、地下に埋められて地表に表示があります。豪邸のように高価な石で作られた大きな墓もあります。建物は、生きている人よりも、亡くなった人のほうが立派です。このような差があります。このギャップで、金があるかないかが、すぐに分かります。

フィリピンにはさまざまな民族がいて、さまざまな文化があり、昔からの伝統的な葬儀があります。自分の家の下に埋める人もいますし、ミイラ化することもあります。木でできたひつぎに、亡くなった人の手足を曲げて座らせる状態に入れるものもあります。ひつぎを山など高い所に置く民族もあります。なぜなら、その民族の考え方では、高いほうが神様に近いということです。また、昔の人は埋めることを嫌がるため、山の上でぶら下げることがあります。そのような、さまざまな民族が2割ほどで、まだミイラ化も存在しているため、特に北ルゴン山が多くある所では、そのような葬儀も行っているようです。

日本でいうところのお盆のようなものもあります。フィリピンはカトリックですから11月1日がお盆に当たります。皆さん、ご存じと思いますが、フィリピンでは普段は非常に渋滞します。1キロメートルや2キロメートルに行くのに、30分から1時間ほどかかり、社会的な問題となっています。最も渋滞がないときがお盆です。なぜかという、皆が墓へ行っているからです。それぞれの墓へ行くため、街に車がありません。

日本とは少し違い、行くだけではなく一晩を過ごします。テントを持ってきて、皆で食べ、祈り、歌います。怖いと思う人には嫌なことかもしれませんが、家族は愛する人の墓地を訪れ、食事を提供し、11月1日から2日か3日まで、最低でも一晩を過ごす人が多いです。

基本的には、フィリピン人は、恐らく木下さんと同じようにふるさとへ帰りたいたいという希望があります。そこはフィリピン人も変わりません。日本に長く暮らし、自分の家族がいたとしても、最終的にはフィリピンに帰りたいたいということがあります。恐らく、自分自身も含めてそのような考えだと思います。あまり分からない場所は、自分が帰る場所ではなく、フィリピンに帰りたいたいという希望があります。しかし、フィリピンに遺体送ることがとても大変です。まず、お金がかかります。基本的には100万円ほどします。

手続きも大変です。日本での市役所や区役所での手続きは、それほどありません。最も大変なのは、領事館や大使館での手続きです。死亡届を大使館に届け出なければなりません。遺体をフィリピンへ送るときには、その手続きが大変です。ひつぎをシールしなければいけません。今は、名古屋領事館ができたのでよかったです。以前は大阪から来てもらう必要があり、それほど簡単には来てもらえませんでした。あるいは、遺体を大阪まで持っていき、そこでシールしてもらいました。その手続きが終わり、そこからフィリピンへ行くには、遺体のために3人分のチケットを取らなければなりません。とてもお金がかかるし、時間もかかります。

遺体はそのままですから、時間がかかるほど状態が悪くなります。フィリピンに着くと、知らない顔になっています。ですから、在日フィリピン人は、これからこの問題を考えなければなりません。私は、個人的には、もし自分が亡くなれば、自分の遺体をフィリピンへ送るための費用として、生命保険を考えなければなりません。しかし、皆これからの課題になりますが、基本的にはフィリピン人が働けなくなると、フィリピンに帰るといふ思いが強いです。

その理由はさまざまだと思います。一つは、日本社会は高齢者に対してそれほど優しくないと皆が思っていることがあります。高齢者になると、恐らく面倒を見てもらえないと考えます。フィリピンに帰れば親戚が世話をします。今まで、フィリピンに仕送りをするなどの世話をしていたので、次は、世話をした人が世話になります。フィリピンに帰れば、誰かに面倒を見てもらえるという考えです。

二つ目に、これから保険のことなどを勉強しないといけません。日本で高齢になると、どのようにしたらいいのかと考える人は少ないです。意識が薄いため、介護保険のこともよく分かっていない人が多いです。病気になったらどのようにするのかということを考えている人も、知っている人もいません。日本にいるフィリピン人のコミュニティーには、この二つを考えてもらわないといけません。その後で、終活をどうしたらいいのか、ということです。

私たちの経験では、病気の人が突然に亡くなるなど、まだ高齢ではない人が日本で多く亡くなっています。そのようなときには、フィリピンにいる家族が遺体を持ち帰りたいという希望があります。フィリピン人のコミュニティーが募金活動をして、費用ができれば送ります。しかし、毎回はできないため、遺灰か遺骨をフィリピンに送ります。今は、それしかできません。恐らく、フィリピン人の移住の歴史は40年ほどだと思います。終活に関する意識は全く薄いため、これからは勉強をする必要があると思います。

司会(神田): ネストールさん、ありがとうございました。先ほどの、中国の王さんとの共通点として、死後はふるさとへ帰りたいという思いがあるということでした。ネストールさんが言ったように、日本は高齢者に優しくないということや、しょうがないから日本で火葬しなければいけないことがこれからなくなり、最後は自分が望む方法と望む場所で迎えられるようになっていかなければいけないと、聞きながら思いました。

<質疑より補足>

司会(神田): 亡くなった人が、本当は、自分はフィリピン本国に遺体を運んでほしいと言っていたのに、それをしてあげることができなかった場合、家族は非常に後悔すると思います。そのようなときのサポートは、どうしていますか。

ネストール: 先ほど、フィリピンに遺体を運ぶと、日本円でいうと100万円ほどと、費用が大変にかかるという話でした。私たちの経験では、亡くなられた人には1人で日本に住んでいる人が多いためお金がありません。フィリピン人のコミュニティーで募金活動を行い、費用ができればそれができるのですが、どのようにしてもできないときには、まずは家族に説明します。

もちろん、本国にいる家族は、日本の文化について分かっていないのが現状です。そのあたりを説明し、日本には火葬しかないため、それが最も安い方法であることを説明しなければいけません。カトリック教徒が多いものですから、日本にあるカトリック教会では、1日か2日の葬儀をしますが、最近では一晩だけの形が多く、最低でもそのようにしてから火葬する形です。家族の思いどおりにはなりません。家族が特にいない場合は、フィリピン人のコミュニティーがそのようにしてくれるだけでもありがたいという話をよく聞きます。

司会(神田): 本人の思いとは異なる、そのような

ことが時々あるということですか。

ネストール：ですから、フィリピン人にはいつも説明しています。終活といいますが、死ぬときの準備をそろそろしないといけないということは、皆に勧めています。

司会（神田）：生命保険は日本と同じですかという質問です。自分が亡くなったときの輸送費になるのかどうか、ということだと思います。

ネストール：恐らく同じです。日本にしても、フィリピンにしても、生命保険は亡くなった場合に幾らもらえるという契約です。例えば、日本で亡くなると300万円もらえる、あるいは600万円もらえるという契約だとして、フィリピンへの移送に100万円かかるため、その100万円を寄付していただくのであれば、亡くなるとフィリピンに帰ることができるという考え方です。

司会（神田）：ネストールさんは、亡くなった後はフィリピンにという思いがありますか。

ネストール：はい。そのようなことも含めて、ふるさとに帰りたいです。しかし、さまざまな考え方がるため、先ほども言いましたが、働ける間は日本にいますが働けなくなるとフィリピンに戻ります。亡くなる前にです。

司会（神田）：老後はフィリピンでということですか。

ネストール：はい。亡くなる前はフィリピンで過ごしたほうが、面倒を見てくれる人が割合にいます。亡くなったとしても、安心できるだろうということがあると思います。

ベトナム人の終活事情

原田美河

神田さんから、このセミナーに参加する話を聞いたときは、最初は軽い気持ちで「はい」と言いました。その後、今回の内容を作るためにさまざまな資料を調べると、分からないことが数多くありました。5年前に祖母が亡くなり、母にそのことを聞きました。初めは母に怒られました。ベトナム人は、あまり死のことを考えたくありません。なぜ、そのような話をしなければならないのかと、怒られたのです。

私は今、介護の仕事をしており、亡くなった方々は数え切れないほどです。今後のことはどうするのか、自分のことを考えました。調べれば調べるほど、感心することとなりました。

話の前に、少し自己紹介します。私の名前は原田美河です。ベトナム出身です。ベトナムの名前はハーです、ハーさんと呼んでください。日本に来て、今年で24年目になります。現在の仕事は、自宅近くの有料老人ホームであるグレイシャスビラ安城で、ユニットの介護主任を務めています。介護の仕事をして13年になります。所属団体は、NPO 法人アジア高齢者・障害者介護福祉協会の理事と、一般社団法人愛知県介護福祉士会の理事を務めています。

近頃は、テレビやネットでもベトナム人に関する事件が増えており、ベトナムという国の名前を聞くことが多いと思います。ベトナムは東南アジアに位置し、北は中国、西はラオス、カンボジアと接しています。先ほどの中国とフィリピンの話は、ベトナムと似ているところがあります。

日本語では、「終活」とは人生を終わるための活動とのことですが、ベトナム語にはありません。その言葉を探してもありませんから、亡くなる前のさまざまなことを考えることは、本人はほとんどせずに、家族が進めることが多いです。亡くなってから家族の中で話し合います。葬儀をどのよ

うに進めればいいのかという、家族での話が中心になります。ベトナム人の死に対する考え方は、ベトナム語で(Sống gửi thác về)です。生きるときは泊まる、死ぬと帰るという意味です。つまり、今、いる所は一時的な領域で、向こうの世界が永遠で本当の人生の領域だということです。死は終わりではないと考えています。人生を終わるための活動や、死を迎えるための活動よりも、向こうの世界へ帰るために善行功德を積んでいく活動のほうが大切だと考えています。

ベトナムの葬儀は、チョウケイに、葬儀の時間や喪服などが細かく定められています。既に6世紀たった今も、基本的には変わりません。宗教や民族により、所々で形式は変わっていきます。また、都市部と農村部でも葬儀の形態は違います。ベトナムは南北に長い国のため、1号線は1700キロメートル以上もあり、考え方も違います。私はベトナムの南の出身で、死についての考え方は南の考え方です。北ベトナムの考え方は少し違うので、これから説明します。

ベトナムは宗教が多い国です。仏教、キリスト教以外で、国に認められる宗教は全7種類あります。それ以外にも小さな宗教や信仰は多くありますが、国の法律で認められているのは7種類だけです。仏教は、葬式のとときに必ず仏壇があります。キリスト教では、イエス様がいます。無宗教の人は祖先崇拜という形になります。先ほど、フィリピンの人も説明していましたが、葬儀は3日から1週間ほどかかることはベトナムも同じです。ただし、それは亡くなってから、例えば仏教なら、家族は仏教の僧侶に相談し、旧暦のカレンダーで葬儀をいつ行うかを見ます。日本でも大安の日などがあるように、葬儀の日は家族や親族にとって困らない日を選ばなければいけません。亡くなってすぐに葬儀を行う人も、1週間かかる方も、それぞれです。

都市と農村部の違いは、特にベトナム北部の都市で人口が多く、家が狭いため、家族葬儀を行うには、大きい家ならいいですが小さい家ではできません。北部では、葬儀場で行われることが多い

です。農村部の小さな村落では、家で葬儀が行われます。1人誰かが亡くなれば、ほとんどの村の人々が手伝いに来ます。この人は料理をする、この人は何をするというように、皆が集まり手伝って葬儀を行います。

都市部では、最近では、葬儀場を利用する人も増えています。都市と農村部の違いは、都市では葬儀が行われると、次は埋葬か火葬にしますが、その場所へ行くまでに車を使うことが多いです。都市では、フィリピンと同じように、通勤ラッシュの時間などには、葬儀の人と車が多く集まり混雑します。都市部では、埋葬か火葬に行く日は、ほとんどの場合、早朝6時前から行きます。そして、亡くなった方が見慣れた街を1周します。例えば学校や会社、よく寄っていた所などを回ってから、火葬場、埋葬場へ送られます。農村では車は使わずに、ほとんどの場合は、山か田んぼへ行きます。同じように村の周りを回ってから埋葬場へ行きます。

ベトナムの南北での考え方の違いは、北部では死というものは人生の終わりという考えで、葬儀は「孝行儀」(コウコウギ)と呼ばれます。親孝行の孝行です。悲しみと涙があふれる葬儀です。特に北部では、自分の代わりに泣く人を雇い、葬儀の一日中、24時間泣いているという悲しい葬儀です。これに対して南部の死の考え方は、「人生の極楽世界へ旅立つ」との考えです。亡くなった人が安心して旅立つために、涙を見せません。よく、結婚式よりも賑やかといわれることが、南部の葬儀の特徴です。

昔は、亡くなった人を送るために昼間は皆が集まり、夜はとても静かでした。亡くなった人が寂しいではないかということで、夜は葬儀楽が行われました。以前は伝統的なものでしたが、最近では近代的なさまざまな音楽を使用します。カラオケもあります。夜中だけではなく24時間、ボリュームを大きくしているため迷惑となります。特に都市部では、3日から1週間かけて、毎晩うるさい状態で休むこともできません。2011年からは、葬儀楽は朝6時前、夜22時以降は禁止すること

になりました。

北部では、葬儀の形式を重視します。南部では葬儀は葬祭と呼ばれています。朝は葬儀で夜は祭りです。夜に音楽隊が演奏し、サーカスをしている所もあります。皆が酒を飲んで、結婚式よりにぎやかです。こちらは伝統的な葬儀祭です。昔の楽器で、歌は悲しいものが多いです。今は現代の若者が歌うカラオケも最近をよく行われ、うるさくて迷惑と考える人も多いです。

南北の違いの二つ目は、北部では弔問者に食事を提供します。弔問者は線香を上げてから皆が集まり、食事をしてから帰ります。これに対して南部では、食事は用意しませんが、テーブルに菓子や茶などの軽食を用意し、通夜の形で、家族とともに亡くなった人についての思い出を話します。

ベトナムでは昔から埋葬が多く、墓はこのような形です。最近では、土地も狭くなり、埋葬する土地を買うために非常に金がかかるため、火葬が増えています。火葬してから、遺骨はお寺等に預けます。毎年3月頃、ベトナムの旧暦の清明節に家族が集まり、遺骨を預けたお寺へ行き、線香を上げるなどします。フィリピンでは、3日間ほどそこに泊まるということです。ベトナムでは1週間はないですが、墓や遺骨がある所に家が近い場合が多く、泊まるのではなく、皆が集まり線香と果物や花などの供え物をし、食事をして周りの人たちにも配ってから、半日ほどで帰ります。

現在、ベトナムの特にホーチミン市では、コロナ禍の中で葬儀の形式も簡略になっていますが、家族への思いは変わらず大事にしています。つい最近、コロナで亡くなった人の葬儀が行われました。ひつぎを買えない人も多くいるため、葬儀の一部は国が負担することになりました。国の軍隊が葬儀を行い、火葬も全て軍隊がします。ひつぎの費用がない人は、国が負担します。

全て、亡くなった人のための品物を売っている店があります。例えば、服や布、靴など、全ては向こうの世界で困らないためです。葬儀のときにこれを買って、燃やして、向こうの世界に送るといふ習慣があります。最近、コロナ禍で亡くなっ

た人のために、このようなものも送られています。向こうの世界では、バイクやマスクも必要らしいです。さらに、ファイザーのワクチンもセットです。これらは全て紙で作られたものです。コロナで亡くなった人のために、これらを燃やして送ります。

日本に住んでいるベトナム人の場合です。私もあまり知らないことが多いですが、愛知県にはベトナム人のコミュニティが数多くあります。私が知っているベトナムの寺は、愛知県だけでも2軒あります。他にもあるかもしれません。稲沢市に1軒と、西尾市に1軒あります。そこに、ベトナムの大きな寺では、毎日のように夕方になるとお経を読みます。このような人が多く集まるのは、年に数回程度です。特にお盆です。お盆はベトナムにもあり、日本と同じです。皆が集まり、経を読み、食事などをします。

実は私も、自分が介護の仕事をしているのだから、もしも日本で亡くなるとどのようにするのかということは、時々、考えています。稲沢市まで遠いですが、最近、以前よりも寺に行こうと思うことがあります。この寺は、以前は名古屋市にありました。稲沢市の民家だったため、新しい建て方です。私も以前は、名古屋市に年に数回は出ていきました。今後、もし自分が亡くなると世話をしてもらおうという考えで、寺へ行く機会を増やそうと考えています。なぜかといいますと、私も日本に来たときは若かったため、死のことはあまり考えたくありませんでした。死のことは縁起が悪いので、誰かと話したり相談したりすることもしません。縁起の悪いことを話し合ったりしません。ですから、一人で考えています。

今後は、自分が亡くなるとどうするかというと、フィリピンの人と同じで保険に入ることもあると思います。母に話を聞いたときは怒られましたが、祖母の葬儀について聞くと、祖母は95歳で亡くなりましたが遺言書がありました。学生用のようなノート1冊の中に、細かい遺言が残っていました。母は8人きょうだいですから、祖母は一人一人の名前と、母はこれをする、寺への連絡は誰が

する、墓地への連絡は誰がする、寺の僧侶は誰が
お願いするのかといったことを書いていました。

驚いたのは、祖母の通帳に自分の葬儀の貯金が入っていました。誰も知りませんでした。ベトナムでは、年金がもらえる高齢者は少なく、2割程度です。祖母は、年金はほとんどありません。子どもたちから毎月の生活費をもらっており、それでためたお金ですが、驚くほどの金額です。遺言書にも、葬儀のときにこれを使ってほしいということでした。そして、8人の子どもについて、誰が何を担当するのかを残していたわけです。ベトナム人は、自分の死のことをあまり考えたくないですが、しかし、95歳の祖母のように考えることは現実的だと思い、自分も考えなければいけないと思いました。

日本で亡くなった多くのベトナム人は、家族の代わりに寺で葬儀が行われます。例えば、最近は、技能実習生の人で、突然死する人も割合にいます。そのときは、仲間や寺にお願いして葬儀をします。費用は、ベトナムのコミュニティーでの寄付です。火葬してから遺骨を家族に送りますが、家族にお金があればいいですが、なければ、また、ベトナムのコミュニティーで寺の僧侶や尼が寄付を呼び掛け、ベトナムの家族に送ります。

名古屋の中村区には、ベトナムのカトリック教会もあります。今後のことや老後のこと、死のことを考えるときは、宗教に頼るほうが多いです。日本で亡くなったベトナム人は、ほとんど寺もしくは教会で葬儀を行い、遺骨は一時的に寺や教会で預かり、最終的にはベトナムの家族に送ります。実は、ベトナム人が日本で亡くなると、日本人の配偶者がいれば家族の墓に入ることもありますが、寺と教会に預かってもらい、墓に入らないことが多いです。以上で話を終わります。

司会（神田）：ベトナムでは、死を考えることや、死について語ることはタブーだということですが、お母さまと話をしてくださいました。最近のコロナ事情や、困らないようにマスクやコロナのワクチンも入れてというあたりは、会場もざわめきま

した。

いくつかコメントをいただいています。マレーシアやシンガポールでも、同じような葬儀だったと記憶にあるというコメントや、沖縄も同じということ。フィリピンなどとも、互いに共通点があると思いました。もう一つ、大事な情報として、国民健康保険に加入している人は、死亡したときに、多くはないですが葬祭費用、埋葬費用を受け取ることができ、役所に申請しないともらえないことをコメントとしていただいています。ベトナムの文化について質問がありますので、後半のディスカッションで伺うかもしれません。

在日コリアンの終活事情

金順愛

一般社団法人 Moment の金順愛です。アンニョンハシムニカ。在日コリアンの場合は、本国でどのような形でということではなく、在日歴が110年になるため、日本においてというところから入ったほうがいいのかと、そのようにしてみました。

渡日の経緯です。日本の植民地となり、多くの人たちが日本へ渡ってきました。東京の調布市という所の上石原には、1930年代の写真を見ると、バラックで、真ん中に井戸があります。こちらが、朝鮮人集落といわれる所です。私の母方の両親が、日本に来たときにここに住んでいました。なぜ調布市上石原に朝鮮人集落ができたかということ、中島飛行機の製作所が近くにあったことからいわれています。

1939年に兵庫県尼崎市で行われた葬儀の写真があります。兵庫県の一般的な地域といえますか、先ほどのベトナムの人たちとも似ていると思いますが、皆で死者を送る場面だと思えます。1957年の大阪市東成区での葬儀の写真もあります。先ほどの1939年と同じような場面が見られます。白い喪服を着ています。男性は帽子を、女性は白い

リボンを付けていました。私も、小さい頃から、白いリボンを付けてはいけないと、母から言われていました。

それは何かというと、死者を送る家族が付けるものだからと言われたことが、非常に記憶に残っています。また、真っ白な服をまとうことも、あまりしないようにと言われた記憶があります。皆さんも韓国のドラマをよく見ると思います。その中では、今もこの光景があると思いますが、黒をまとうて黒い腕章を付ける葬儀の場面が、朝鮮半島でも日本でも混在しています。喪服も変わってきていると思います。

1953年の葬儀の様子の写真を見ると、真ん中に写真やお供えがあります。このようにして見送りますが、こちらは道ばたです。朝鮮半島でも日本でも、見送った後で次に遺体を埋める所へ運ぶという葬儀でした。そのように考えると、先ほどのベトナムやフィリピンの場合と重なってきます。葬儀の場面ではお供えがあり、この前で一連の儀式のようなことが行われます。チェサといい、亡くなった後にも行われます。亡くなった日の命日をキイルといいますが、命日の前日の夜に行うチェサ(祭祀)があります。それと同じ形です。

朝鮮半島では、喪中の儀式をサンレ(喪礼)といい、儒教の影響が濃く反映されていました。一世の時代には、本国で葬儀を行うことが多かったものの、現在は、日本の葬儀の影響を受けつつ、変化を遂げています。これはあくまでも私の基準ですが、半世紀以上が過ぎても、わずかながら微妙に残っているものが何個かあります。スイ(寿衣)という、亡くなった人に着させる服があります。還暦のときに、スイを作ると長生きするといいますが、私が20歳の頃、父と母のスイを作るために、アルバイトをしたことがあります。友人同士でそのような話になり、何色のスイにするか話し合った記憶があります。

サンレは儀式全般ですが、サンボク(喪服)というものが喪服です。儀式の際に身に着けるものです。こちら、チョゴリを作っている人たちに頼むと一日で用意してくれて、それをまといます。

最も象徴的なものが、ミョンジョン(明旌)というひつぎにかぶせる赤い布です。こちらは、赤い布に白い字で、名前やどこの出身かなどを書きます。そうしたことを書いてひつぎにかぶせることは、意外と残っています。ですから、小さな頃は、赤い字で名前を書くことと怒られたことも記憶にあります。学校でも、絶対に名前を赤い字で書いてはいけないと言われました。赤い布に白い字で書くのですが、赤いインクで名前を書くなどと言われたことを思い出します。この布をミョンジョンといいいます。

先ほど言ったチェサは、命日の前はキジェサといって夜に行い、お盆や正月は朝に行きます。朝にお供えをして、皆でお供えしたものを食べます。これをウムボク(飲服)といいいます。小さな頃は、お供えしたもので何を食べるのか、自分は何をウムボクするのが楽しみでした。チェサを行う時間は夜の12時でした。皆、眠いのですが、それでも必ず12時に行きました。ところが、12時に行うのは負担がとても大きいので、日本全国で申し合わせたわけではないのですが、今は、ほとんどの場合、夜8時頃に行われます。不思議だと思えます。それぞれに仕事がありますし、日にちにこだわるため、夜中というよりも徐々に早い時間になってきています。生きている人に合わせているところが、面白いと思えます。

『月刊イオ』という、私たちのコミュニティーの雑誌があります。2004年に、チェサで具体的に何を行うのか、何をお供えするのかについて特集しています。特集は何回かしています。ご飯や汁がありますが、山のもの、陸のもの、海のことをそろえます。例えば魚であれば、黄色いイシモチなど珍しいものです。しかし、今は黄色いイシモチは手に入りません。大阪の鶴橋だけは、韓国から輸入しているのかどうか分かりませんが、黄色いイシモチを売っています。代用品を使ったり、奇数にしたりするなどさまざまなことをします。

儀式の中に、クンヂョルという大きなお辞儀があります。韓国ドラマで見たことがあると思えます。亡くなった人には2回、生きている人には1

回、頭を大きく伏せます。男性と女性ではお辞儀の仕方が違うので、説明をしています。このような特集をしたとき、『月刊イオ』に感想が寄せられたそうです。チェサを美化しないでほしいという意見がありました。それは何かというと、女性が何から何まで全て準備をすることや、食べて騒ぐ人たちは男性で、女性は、基本的に台所にいます。そのようなことに関して意見があったそうです。こちらは、木で作られたチェサの台です。びょうぶがあります。このようなものが家の宝になります。これらを、皆さんに見てほしいと、韓人資料館に寄付して残した人もいます。

ここからは、異文化終活の概念ということで、王（木下）さんが、外国人高齢者が日本での老後生活をどのように設計していくのか、つまり、老後における生活設計のことだということで、1回目の冊子でも紹介されました。このことを考えていく上で、前後しますが、先ほどはベトナム人のコミュニティでも寺の話が出ましたが、朝鮮の代表的な寺はこちらの3カ所になります。京都の万寿寺、小平市の国平寺、そして大阪の統国寺です。各地にもいくつかあります。

住職のことをスニムと言います。在日のスニムで有名なユ・ジョンムクスニムは、戦後、朝鮮への帰還途中に沈没した浮島丸の乗船者たちの遺骨を、万寿寺に安置したそうです。浮島丸の問題だけではなく、日本で亡くなった人たちの遺骨を、いつかは朝鮮の地に安置したいという遺族の思いとともに預かり納骨堂に納めました。それが、日本における朝鮮寺の始まりといえますか、同胞たちは、朝鮮の寺として大事にしてきた経緯があります。

しかし、時が流れ、日本の墓地に墓を建てる人が多くなりました。朝鮮でも韓国でも、墓は土葬で土盛りの墓でした。しかし、時代とともに火葬が増え、墓もほとんどが納骨になりました。現在も、朝鮮では土葬を願う人もいるとの事。韓国では、ほとんど火葬になっていると思います。火葬にした人たちは、お骨を納骨堂に納めたり、川や海に流したり、韓国ドラマでもよく観られますね。

墓についても『月刊イオ』2001年8月号で特集を組んでいます。2001年なので20年前です。こちらに出ているのは、国平寺という小平市にある寺の墓です。真ん中の墓は、なぜ丸いかというと、祖国での土葬のイメージで、石だけでもこのような形にしています。また、墓石にハングルでプリと書いてあります。根という意味です。家族という意味での根であり、自分の名前に根が入っているから。家族と刻んでみたりしています。なぜ墓にするかということ、結局のところ、墓を通して在日のルーツを伝えるということ。納骨堂から墓へ移っています。これが20年前の話なので、今はまた、さらに変わってきていると思いますが、既に20年前、国平寺のスニムは、そのような思いを持つ在日の人だけではなく、外国にルーツを持つ人たちのオリジナルの墓を、墓地に作るができるようにしているそうです。

在日コリアンの「終活」について考えたとき、長男に全てを託す文化があります。とにかく、男の子が生まれると喜ばれ、女の子が生まれると悲しまれるという文化が、非常に根深くあります。その中で、全て長男がどうかしてくれるということ。また、死生観を語ることを不吉と考える文化があります。墓を作れる人もいれば、作れない人もいるという差異があります。

最近、マイクロアグレッションという言葉を知りましたので、あちらこちらで使っています。コミュニティ内部にある差異を無視したり、無価値化したりすることでさらなる障害が生じるとき、それはとても悲しいことですが、コミュニティ内部で起きている抑圧について可視化し、話し合えるためのツールとしてマイクロアグレッションという概念は有用性があるかもしれないということです。在日本朝鮮人人権協会が出している『人権と生活』という読み応えがある会報があり、その中でこのような概念が発信されていました。

そのようなことを自覚できない現状が、コミュニティにあると思います。私たちは常に抑圧されているため、無意識の中の差別や社会的差別、国家的ないじめというレイシズムをこれまで感じ

ながら生きてきました。アイデンティティを常に問われる精神的なストレスの中で、自死率が高い現状があるといわれています。

「終活」を考える上での提言という形でまとめました。価値観の多様化に思いをはせるということ。チェサをする人、できない人、しない人がいます。祖国の統一を願い、納骨堂に遺骨を預けるままの人がいれば、墓を作る人もいます。日本名で葬儀をする人もいれば、ミョンジョンだけでもかぶせようとする人がいます。

ミョンジョル（名節）を意識する。旧盆や旧正月があることに思いを馳せてほしいということです。これは、日本の社会がそのような温かい社会だといいなということです。8月15日の旧暦のお盆をチュソク（秋夕）といいます。そのときにミョンジョルチェサをしたりします。旧正月を中国では「春節」として祝います。正月を西暦で祝う人もいれば、旧暦でする人もいて、多様になっています。生まれ育った所に帰れない、日本人化している、根本的で歴史的な背景があることを学んでほしいという部分が、終活を通しての一つの提言です。

二つ目の提言です。震災を皆で体験しています。日本人だけではなく、日本に住む皆で体験しています。亡くなった人々とその家族、友人たちが教えてくれたことを学習することです。突然に亡くなってしまうことを体験し、その人たちがどれほどつらかったのか、その人たちが何を伝えたかったかということは、普遍的な問題だと思います。そのことをともに考えることを、私たちは生きた者として、日本に住む人間として、それを少しでも考えることができたとき、亡くなった人たちの供養になるのではないかと思います。

いつ、何が起きるのかわかりません。自分がいつ死ぬかわからないということを想像するのは、非常に大変なことでつらいですが、死生観を話し合える環境作り、親子や同僚などと語り合える環境があるといいと思います。日本に生きる全ての人々が共有できる事だと思います。

最後に、終活を考える上での提言3は、生きが

いを生み出すソーシャルワークです。多文化ソーシャルワークという意味でもあります。私は、ケアマネジャーを主たる仕事としています。社会福祉士としての要求性と、ケアマネジャーとしてすべきことのジレンマを、非常に感じながら動いています。介護保険だけでは、その人の尊厳は守り切れません。しかし、その人がその人らしく生きる、自分が自分らしく生きる上で、ケアプランとライフプラン、そして生きがいをトータル的にサポートできることが、多文化ソーシャルワークの醍醐味ではないかと思います。

今回の試みは、非常に大事なことで、木下さんをはじめとして、皆さんががんばっていることに少しでも共鳴し、共感し、力になればと思います。勉強しました。ありがとうございました。

司会（神田）：提言も含めて、大変、大事なメッセージをいただいたと思います。今回、私たちは終活、死生観を含めて学んでいます。金さんは、先ほど、その人がその人らしく生きるための温かい社会と言いましたが、全ての人を受容できるような温かい社会を、これからつくっていったらいいと、聞きながら思いました。

参加者からは、多文化ソーシャルワークの醍醐味に共感しますというコメントもいただいています。こちらのコメントは、ディスカッションの中で皆さんに話を伺ってみたいと思います。

ネパール人の終活事情

シバラム・カドカ

木下さんに、ネパールの葬儀についての話を依頼され、発表の準備をしましたが、自分もあまり分からないため、母と相談しました。自分が知っている範囲で話したいと思います。私はシバラム・カドカですが、20歳頃に来日しました。ネパールの葬儀は、一度だけ参加したことがあります。必

然的に、自分では何も分からないということですから、母に聞いた話をします。

ネパールは小さい国ですが、民族が多いです。ですから、民族により方法は違います。私が知っている方法は、二つに分けることができます。亡くなった後、川で葬儀をして遺体を燃やすのか、山の上で行うのかです。私はカドカという名字です。チェトリ民族といいますか、私たちの民族は川で行います。山の上ではありません。しかし、私が生まれた所は山です。そこでは、私たちの民族は少ないです。ジレルという民族が多いです。そのような人々は、川ではなく山の上で行います。川か、山の上かで分けることができます。

本日は、私の民族であるチェトリが、川で行う儀式のことを話します。本日の他の人の話を聞くと、お金があるかないかで墓が違うという話がありました。私が知っている範囲では、ネパールでは特にお金がかかる方法ではないと思います。また、ネパールでは特に墓を作りません。ですから、亡くなるとこのようにします。これはカトマンズですが、田舎ではどこで遺体を焼くのかというと、二つの川が一つになる所です。私の実家の場合は、歩いて2時間ほどかかります。

亡くなると、見回りをしなければいけません。できるだけ運んでいくことにします。家や病院など亡くなった所に、あまり置かないようにして、できるだけ早くします。亡くなったことを早く伝えるようにして、早く皆が集まり、川のほうへ運びます。私の祖父も祖母も、10年ほど前に亡くなりました。母に聞くと、祖母が亡くなったときは、亡くなってすぐにカトマンズのほうに墓地を置くようです。少し形が違う墓地があり、祖母の場合は違う形の墓地を、頭の下から入れるようです。

また、牛乳で口を洗うらしいです。ネパールでは、宗教的には7割ほどがヒンズー教なので、牛乳はとても新鮮できれいなものとして考えられているので、祖母が亡くなった後も牛乳で口の周りを洗います。川のほうへ運ぶと、まず足を洗います。川まで運ぶときに、これは日本語では分かりませんが、口で音を出せます。2時間歩いて川ま

で行きますが、その間はこれで音を出します。音を聞くだけでも、周りの人が誰かが亡くなって運んでいることが分かります。悲しい音が出るのを、私も聞いたことがあります。運ぶときに一番前にいる人は、お金と米を少し道に落として、川へ運んでいきます。

先ほどの韓国の話がありましたが、ネパールも息子が大事です。ほとんど男性が行います。ですから、自分が亡くなった場合のことを考え、自分の息子が生まれてほしいという文化でもあります。息子が一番前で、あとは身内の人々が遺体を持って3度回ります。その後、火がついた薪を持って3度回り、頭のほうから焼き上がります。最後の灰は川に流します。これで行事は終わります。屋台を焼いた後は、髪の毛を全てそり丸刈りにします。

3度回って丸刈りにした後は、白い服を着て、それから家のほうに戻ります。戻るときは足には何も履かずに、はだしです。家に戻ると、葬儀を13日間にわたって行います。息子たちは、13の間は他の人に触ることができません。決まった場所があり、そこから動くことがあまりできません。家から少し離れた所に、人の形のスミルというものを作り、毎日祈ります。そこで、毎日水を30回あげることが、13日間続きます。

亡くなった最初の日、家族は何も食べることができません。大事なことですが、丸刈りにします。

5日間に分けて、『The Garuda Purana』(Knowledge of Death and Rebirth) という本を読み、みんなが聞きます。人が亡くなる時、泣くべきなのか、喜ぶべきなのか、そして、それだけではなくお金と人生についてなど、人生は何かについて皆に知識を与えます。それは僧侶が説明します。死ぬことは怖くないということです。悲しむ家族たちも冷静になれるように、この本(The Garuda Purana) は書かれているようです。私も、深く理解できるまで、この本を読みたいです。ネパールへ帰ってから本を読み、意味を深く理解したいです。

先ほど言った、13日間を過ごす場所の写真があります。この写真を見るとお父さんが亡くなったことが分かります。お母さんと息子がいて、このように息子が丸刈りにして白い服を着ています。丸刈りではなく、普通の服を着ている人が僧侶です。1年間は厳しい習慣があります。例えば、家族の誰かが亡くなると、1年中、家族の誰も結婚することができません。また、日本の正月のようなダサインという祭りがありますが、そのような祭りに参加することができません。寺へ行き祈ることもできません。歌を歌うことや踊ることもできません。

最近では守られていないかもしれませんが、母親が亡くなると、牛乳を飲んではいけならしいです。父親が亡くなると、ヨーグルトを飲んではいけならしいです。調べていくと、このようなことが細かく、数多くあります。私も、最近では特に、ネパールの文化に関心があります。母親が亡くなると、なぜ牛乳が飲めないのか調べていくと、何か相応の理由があるのかと思いますが、今の段階では調べていないし誰かに聞いたこともないため、いずれ調べたいと思います。

日本で亡くなった場合のケースです。1年前に、私の知り合いの奥さんが自殺してしまい、葬儀に参加したことがあります。ネパールに遺体を送りたいし、ネパールの家族も送ってほしいという願いがありますが、お金がかかるし、警察に聞くと手続きも大変ということで、日本で行いました。ほとんどは、焼くだけのことをします。ネパールの文化的なことは、一切、行いませんでした。日本の場合には、恐らく誰もネパールの決まりでは、完璧ではないですが、行っていないのではないかと思います。

例えば、マレーシアやカタール、ドバイなど、日本ではない国へも出稼ぎでよく行きます。そちらからは、ほとんどの場合、遺体をネパールへ運びます。それは、出稼ぎに行く前からの会社との契約があるようです。もしも亡くなった場合は、遺体をネパールへ戻るといった契約ができており、お金の負担も会社らしいです。日本の場合は、そ

のようなことがないし、ほとんどは留学生なので、ネパールの方法で葬儀をすることは日本では難しいと思います。

以上が、ネパールの葬儀についての簡単な紹介でした。私も知らないことが多いので、2、3年もすればネパールに帰ろうと思っています。帰って勉強したいと思います。

司会（神田）：カドカさん、ありがとうございます。私も初めて聞くことが多い、ネパールの葬儀事情、死生観でした。ありがとうございます。

質疑応答

司会（神田）：親が高齢化していく中で、認知機能が低下していき母語でしかコミュニケーションが取れなくなり、日本語が分からなくなってしまった人の家族は、困ることが出てくると思います。どのような準備が必要だと思えますかという質問があります。こちらは、皆さんに伺いたいと思います。

本日は、NPO 法人 863 の理事長のラビンダーさんも参加しています。ラビンダーさん、カドカさん、金さん、原田（ハー）さんに伺いたいと思います。日本語を忘れて、母語しか分からなくなってしまった場合、家族は困ると思いますが、その前にどのような準備が必要だと思えますか。親が日本語を忘れていき、子どもは日本語しか話せないときに、どのような準備が必要ですかという質問です。あるいは、本人が望む方法で、日本で亡くなることができなかつた場合、家族の後悔や罪悪感について、どのように考えればよいと思えますか。金さんからお願いします。

金：在日コリアンの場合は、そのようなことが数多くあったと思います。特に、在日一世の人たちが認知症になり、母語帰りするということは、よく言われていました。在日コリアンの場合は、今、そのような時代は過ぎてしまいました。フィリピン

ンの人たちや中国の人たちは、まさにこの命題に直面していただろうと予測されます。そのような場合の家族の在り方というのは、まずは母語でコミュニケーションを取ることで、誰か第三者を介してでも、母語を使うことで、本人の気持ちであったり、ストレスであったりを取る作業を、社会資源を使ってできると非常にいいと思います。

司会（神田）：準備というよりも、そのときに本人の意思を、本人の言葉でということですか。

金：認知症になった時点では遅いため、常に、本人の意思を確認できるように話し合うことです。今は、話し合えない家族が、とても多いと思います。常に、何を考えているのかということを読み取り、想像し、思いをはせる、家族の努力があるといいと思います。

ラビンダー（NPO 法人 863）：はじめまして。NPO 法人 863 という団体の代表を務めています。本日は、多くの話を聞かせていただき、とても勉強になりました。外国人なのに、知らないことが多くありました。NPO 法人 863 という団体は、認定は下っていますが、この団体では、今のところ、個人の考え方しか見えません。本日は、ぜひ、多くの人に自分のビジョンを聞きたいです。皆さんはどのように思いますか。

日本に外国人は 300 万人近くいて、亡くなるのは毎日 20 人ほどです。NPO 法人 863 という団体の考え方とすれば、今は、皆ががんばっていますが人それぞれです。特に、現在はコロナでお金に困っている人が割合にいます。余裕がない人が大勢いますから、葬儀代をそれぞれに払うよりも、ひとまず、国籍や宗教に関係なく皆で共に行おうというものです。一つの所にお金を集め、毎日 20 人が亡くなる中で、お金がない 1 人か 2 人の人は、近くの葬儀会社に行きその請求書を回してもらえばよいという、NPO 法人 863 を設立しました。

組合も多くあります。人それぞれに分かれているため、少しずつ皆と連絡するなどしています。

皆で一緒になったほうがいいと思っています。私たちの考え方はいかがですか。ぜひコメントをお願いします。

司会（神田）：とても大切な活動をしていると思います。葬儀ができない人からの相談も多いということですが、さまざまな国の人がいますか。

原田（ハ一）さんとカドカさんにも話を伺いたいと思います。原田（ハ一）さん、お願いします。

原田：私も、先ほど金さんが言われたことと同様に思います。認知症になってからでは遅いです。本人が自分を認知症と認めていないし、家族も経験がない人では、認知症なのかただの物忘れなのか判断が難しいです。いつ認知症になるのか分かりません。元気なうちに将来のことを考えて、今後、もしそのようになったらどのようにするのかと、常に話し合うことのほうが大事だと思います。

また、もしも日本語を忘れてしまうとどのようにするかというと、私も考えましたが、できれば、自分のベトナムのコミュニティーともしっかりと交流し、情報交換すれば、このようにすれば助けてもらえるということもあるのではないかと思います。ベトナムだけではありません。チャットのさまざまなメッセージも見ましたが、外国人向けの情報を共有できる所と交流すればと考えています。

司会（神田）まさに NPO 法人 863 の活動が、今、ハ一さんが言ったことにつながると思います。カドカさんはいかがですか。

カドカ：最近、感じることがあります。私がネパールにいたときは、9 人家族で育ちました。20 歳になってから日本に来ていますが、実家に行くと、死ぬときはどのようにしたいということは自然に分かります。例えば、私の祖母でいうと、私が亡くなった後は、皆に提供する食事のお金は自分で出したいから、若い頃から、自分が亡くなった後の皆の食事はこの程度のお金でと伝えてくれます。

亡くなることについて、何もコミュニケーショ

ンはありませんでしたが、誰かが亡くなる際に見て自然に覚えました。海外にいと、そのように自然に覚えることがなくなります。ですから、言葉の問題も出ると思います。一番、大事なのは、そのようになる前に、亡くなることについて話し合うことだと思います。以前、聞いたことがあるのですが、最近では病院で亡くなることが多く、亡くなることを怖がっていると思います。ネパールでは、家の中で亡くなることが多いため、死というものに慣れることが多いです。しかし、発展していくと病院で亡くなることも多く、死が怖いということもあります。

また、コメントの中で気になったのは、自分だったら何をしたいのかということです。ネパール人は皆、亡くなる時はネパールに帰りたい、ネパールで亡くなりたいたいと思う人が多いです。日本に住むネパール人だけではなく、アメリカなど海外にいるネパール人は多いです。ネパールに帰って亡くなりたいたいという望みはあります。

司会 (神田) : ネパールの文化では、亡くなることについて話すことは悪いことではないのですか。タブーではないのですか。

カドカ : 文化的には、しなければいけないことです。そもそも、亡くなることについて話し合うべきという文化です。最近の私たちのような若い人々は、自分の文化を失っていつているところでは疑問ではあります。話すことは仏のことで、おかしなことではないです。例えば、自分の祖母が、自分が亡くなる時にはこうだと言います。祖母の場合は、病気で入院していましたが、どうしても自分のベッドで死にたいということで、早く自分のベッドに帰りたいと言って、戻ってきてベッドで亡くなりました。亡くなる前に、全て教えました。ここに鍵があるということや、これはこうしてほしいと指示してから亡くなりました。どちらかという、このようなことが普通だと思います。

司会 (神田) : 別の質問です。介護が必要なときに、自分の国に帰っても介護してくれる家族がいないという状況は多くないのですか。日本で介護を受けなければならない場合、不便なことや困ることがあると伺いたいということです。おそらく、皆さんは現場でそのような話が数多くあると思います。どなたかいかがですか。王さん、お願いします。

木下 (王) : おそらく、どちらで介護を受けたいのか、あるいは、先ほども話があったように、国に帰りたいのかどうかです。介護においては、全体的に日本人も同じですが、日本への帰国者のケースを見ていると、在宅介護を望む人は基本的に多いです。全体のサービスの利用状況を見ていると、在宅が最も多く、その次が通所介護です。これは、心理的に国籍を問わず、自分の家が一番いいと思うからです。

質問の回答になっているかどうか分かりませんが、自宅介護、あるいは、本来は日本ではなく国で介護を受けたいと皆さんが考えていると思います。現状は難しいため、今、生活している日本で介護を受けることを考えている人が、基本的には多いのではないかと思います。ちなみ、私は、現実的に日本で介護を受けるしかありません。例えば、中国へ行き、老後を過ごすことは、非常に非現実的です。これが、ニューカマーの多くが悩んでいる課題でもあります。

単純に、国へ帰れば良いといっても、何十年も国を離れていて、そこに生活基盤も人脈もない中で、果たして理想とした介護が受けられるのかどうか、老後を過ごせるのかどうかという問題があると思います。

司会 (神田) : 実に多様化しています。日本にきた時期や、日本で過ごした年月、本国の状況などが一人一人異なると思います。最後に、こちらからの質問というより、日本で暮らす外国人として、

多文化共生という観点から本日のテーマについて一言ずつお願いします。お話ししていただいた順番で、原田（ハ一）さんからお願いします。

原田：私が、初めにあいさつをしたときにも話したように、今回のテーマで受けましたが、調べるほど知らないことが多くありました。自分にとって大事なことでも、今まで考えたこともないことを、この機会に考えるようになり、よかったと思います。また、本日のディスカッションのときにさまざまな質問がありましたが、答えがまだ出ていないため、今後どのようにするのかという自分自身の課題になっています。NPO 法人 863 の理事長も話したように、今、外国人は 300 万人以上も日本に住んでいますが、皆、ばらばらです。それぞれの思いを持っているのに、自分の葬儀をどのように行いたいのか、不可能なことが可能になればどのようにするのかということも課題となっていると私自身は思います。

カドカ：よかったです。自分自身に質問が多くあります。私は、国際コミュニケーションの大学院で経済開発を勉強してきました。生きている間の異文化交流については、多く話してきました。亡くなった後のことを、本日、初めて実際に議論することができ、とてもうれしいです。最近、自分でチャレンジしていることは、自分は幸せになるために生まれたのだから、毎日を悲しむのは間違いだということです。どうすれば、自分を自分で幸せにできるのかと、最近は特に考え始めました。ですから、亡くなるまで幸せになりたいと思います。

私の気持ちは、ネパールに住みたいということです。日本では、ヒンズー教的な葬儀を行うことは難しいです。川で遺体を焼くのは難しいと思います。今後、日本の社会はどのように変わっていくのかは、自分の疑問でもあります。

司会（神田）：今後、日本の社会が、ハ一さんが言われたように、ヒンズー教で不可能だと思われる

ことが可能になる社会ということです。せっかくですから、NPO 法人 863 の理事長のラビンダーさんに一言お願いします。

ラビンダー：私自身が考えているのは、私たちにはコミュニケーションがないということです。同じ国、同じ宗教の人でもコミュニケーションが少ないです。皆が幸せなときにはコミュニケーションがなくても大丈夫ですが、人が亡くなると頭が回らなくなります。さまざまなことの案内がホームページに出ています。ホームページから案内はできますがお金は出てきません。余裕がある人や顔の広い人は、おそらくすぐに集まると思いますが、外国人は一人暮らしが多いため、顔が広くない人は、お金は日本人や政府の負担になるケースがゼロではありません。私は、コミュニケーションとお金のところに、一番、力を入れています。皆さん、一緒になりましょう。

司会（神田）：大切なメッセージをありがとうございます。金さん、お願いします。

金：今、ケアマネジャーとして、さまざまなことを感じています。利用者はコリアンだけではなく、日本人やフィリピン人などです。在日コリアン一世で寝たきりの人の、訪問看護、訪問介護、訪問入浴にあたっている事業者の皆さんが、その人にオモニ、お母さん、あるいはハンメ、おばあちゃんという呼び掛けをしています。私は、ここから始まると思っています。

日本の社会において、在日コリアンは故郷に帰りたくても帰れません。そして、ここで死ぬしかありませんでした。そのような一世たちの姿を見てきました。その人たちのことを思ったとき、今、外国にルーツを持つ人たちが、本国に帰る選択ができない場合も出てくると思います。そのように、日本の社会の中で幸せな最期を迎えるにあたり、日本の社会における理解というものにとっても大切だと思います。

先ほど、火葬にするのか土葬にするのかという

ところで、罪悪感を感じてしまう家族の話がありました。まさしく、在日コリアンの状況だと思います。私の一世のオモニも、火葬に関して非常に嫌がっていたことを記憶しています。ですから、そのようなことを考えた場合、日本の社会の隣人たちが、どれほどつらいだろうか、オモニと呼ばば少しは気持ちがほぐれるだろうか、そのような一つ一つの小さな積み重ねがとても大事なのではないかと思います。

司会（神田）：話の中で言われた、温かく受容する社会を、私たちがどのようにつくっていきけるかということだと思います。時間を過ぎてしまいました。では、山本先生に総括をお願いします。

まとめ

山本：皆さん、参加していただき、また、多くの質問等をいただきありがとうございました。日本に暮らす、異文化を持つ外国の方々の「終活」といいますか、老後をどのように捉えるかというところで、悩んだり考えたりしている状況もあるのではないかと思います、そのような方々の、まずは歴史のあるいは文化的な背景と、どのような状況にあるのかということを知ろうということで、昨年度からこのセミナーを始めました。本日は、前回とは違う国の方々の、背景や状況を知ることができたと思います。課題となっていることは、以下の3点にまとめられるかと思います。

第1に、「終活」に関わる多様な価値観や方法をまずは知り合うということです。国籍、宗教、民族、都市と農村、地域、世代の違い等による「死」やそれを話題にすることについての考え方の違い、葬儀・弔い方や墓の違い、伝統とその変化、その中にある貧富の差やジェンダーの問題など、多様性があることがわかりました。多様な考え方を尊重し理解し合うことが大事でしょう。

第2に、そのような違いを背景に、日本に在住

している外国人の方が、老後をどこで過ごしたいのか、葬儀や埋葬をどのようにしたいのかなどについて、家族や周囲の人々と元気なうちから話し合ったり調べたりできる環境をつくっていくことです。故郷に帰りたくても帰れない場合、希望することと現実にはギャップがあつて、実際には社会的・制度的・金銭的に難しいこともあります。

第3に、それらを本人・家族任せにするのではなく、社会的な支援体制をつくっていくことです。年金や介護保険、生命保険や支援に関する情報が得やすい環境づくりや地域でのつながりづくり、母語でのコミュニケーションにおける支援、遺体の移送や墓をつくる際の支援、教会や寺院、あるいは葬儀業者による支援、介護に関する社会的な支援などをどのようにしていくのかということ、これから外国人高齢者が増えていく日本社会の中では課題になっていることだと思います。何を重点的に支援していけばいいのか、そのようなシステムをどのように作っていけばいいのかということが、問われていると思います。

来年度も、第3弾を予定しています。それと同時に、今、生涯発達研究所では、日本に大勢いる外国人に、高齢時期の支援をどのように考えているのか、当事者に対するアンケートと聞き取り調査を予定しています。その際には、協力をいただければありがたいと思います。今後、本日、課題になったことなどを整理し、次につなげていきたいと思っています。

付記

本冊子の作成にあたっては、令和3年度科学研究費補助金研究(基盤研究(B)(一般)「多様化社会における教育と社会福祉の連携による生涯発達支援に関する総合的研究」(研究代表:山本理絵 課題番号21 H00821)の助成を受けている。